



Special Interview

藏本 龍介 東京大学東洋文化研究所 教授

■ 仏教との出会い

— 藏本先生は、どのようなきっかけでミャンマー仏教を専門にされたのでしょうか。



高校時代、自宅にあった中村元『原始仏教：その思想と生活』（1970年、NHK ブックス）が愛読書の一つでした。仏陀の教えに救われる思いがして、大学では仏教学を専攻しようと漠然と考えていたのですが、実際には文化人類学の道へ進みました。転機となったのは進学前に観た『黄金のパゴダ：ミャンマー・祭りと葬送の日々』というドキュメンタリー番組でした（NHK、1998年放送）。番組の中で、生後間もない赤ん坊を亡くした若い女性が、「私の母乳が十分に出なかったので、あの子は死んでしまった。来世は母乳がよく出る母親のところへ生まれてほしい」と語っていました。なんとなく知っていた輪廻転生という概念が、このような世界として現れていることに衝撃を受けました。「仏陀の教えは実際にどのように生きられているのか」。これが現在に至るまで、私の研究の大きな問いとなっています。大学進学後、この問いを探究するために、私が研究対象としたのが南・東南アジアに広がっている上座部仏教です。上座部仏教圏では、仏教を基礎とした国家・社会・生活の仕組みがみられるからです。具体的には、卒業論文でスリランカ、修士論文ではタイを扱い、博士課程になった時に、フィールドとして選んだのがミャンマーでした。

高校時代、自宅にあった中村元『原始仏教：その思想と生活』（1970年、NHK ブックス）が愛読書の一つでした。仏陀の教えに救われる思いがして、大学では仏教学を専攻しようと漠然と考えていたのですが、実際には文化人類学の道へ進みました。転機となったのは進学前に観た『黄金のパゴダ：ミャンマー・祭りと葬送の日々』というドキュメンタリー番組でした（NHK、1998年放送）。番組の中で、生後間もない赤ん坊を亡くした若い女性が、「私の母乳が十分に出なかったので、あの子は死んでしまった。来世は母乳がよく出る母親のところへ生まれてほしい」と語っていました。なんとなく知っていた輪廻転生という概念が、このような世界として現れていることに衝撃を受けました。「仏陀の教えは実際にどのように生きられているのか」。これが現在に至るまで、私の研究の大きな問いとなっています。大学進学後、この問いを探究するために、私が研究対象としたのが南・東南アジアに広がっている上座部仏教です。上座部仏教圏では、仏教を基礎とした国家・社会・生活の仕組みがみられるからです。具体的には、卒業論文でスリランカ、修士論文ではタイを扱い、博士課程になった時に、フィールドとして選んだのがミャンマーでした。

■ 現地調査の重要性と難しさ 「仏教のリアリティ」

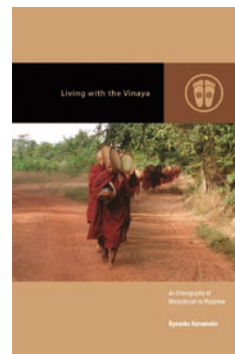
— 現地調査を通して、文献研究だけではつかめなかった「仏教のリアリティ」を実感した出来事がありますか。

あります。ミャンマー仏教の研究は、1960年代以降、軍事政権による鎖国的な状況下で時間が止まっていました。長い間、研究者が足を踏み入れることのできない「空白の地」だったのです。そのため、現地目で目にする光景は、私にとってすべてが新しい世界の発見でした。これまでの研究では、主に在家信者の信仰生活が語られてきましたが、肝心の僧侶たちが壁の向こうでどう暮らしているのかは、謎に包まれたままでした。僧院の中は、まさにブラックボックスだったのです。そこ

で私は、自ら出家してその壁の内側に入る道を選びました。僧侶として暮らし、内側からその日常や運営の実態を観察できたことは、何物にも代えがたい貴重な経験となりました。

— 実際に中に入って行く調査には、困難も多かったのではないのでしょうか。

そうですね。文化人類学では、外から眺めるのではなく、生活を共にする「参与観察」という手法を重視します。内側から見ることで初めて、彼らの言葉や行動の真意が見えてくるからです。とはいえ、実際には「入る」こと自体が非常に難しいのが現実です。ビザの問題や言語の壁はもちろん、相手の懐に入り信頼を得るまでには長い時間と労力が必要です。スタートラインに立つまでが一苦勞ですし、いざ生活を始めてからも、病気やトラブルなど、心折れそうになる場面は何度もありました。それでも続けられたのは、現地で私を支え、応援してくれた多くの人々がいたからです。そうした温かい交流や苦勞の一つひとつを通して、私の世界は少しずつ広がり、ミャンマー仏教の深淵へと導かれていきました。調査を通じて、私自身が変化し、成長させてもらえる。これこそが、身体を使って内側に入り込むフィールドワークの最大の醍醐味だと思います。



Ryosuke Kuramoto, *Living with the Vinaya: An Ethnography of Monasticism in Myanmar* (University of Hawai'i Press, 2024)

■ 「仏教」という言葉の意味の変化

— ミャンマーの寺院や人々と関わるなかで、「仏教」という言葉の意味が自分の中で変化した経験があれば教えてください。

まず、「仏教（Buddhism）」という言葉そのものの歴史的背景に触れる必要があります。これは19世紀にヨーロッパで作られた学術用語であり、ミャンマーの現地社会にもともと存在した概念ではありません。彼らはそれを単に「教え」や「仏陀の言葉」と呼び、西洋的な意味での「宗教」という枠組みとは異なる捉え方をしていました。かつての私も、仏教を「キリスト教やイスラム教と並ぶ選択肢（オルタナティブ）の一つ」として、相対的に捉えていました。しかし、現地に入り込んでいくにつれ、その認識は根本から覆されました。彼らにとっての仏陀の教えとは、並列化できる「宗教の

一つ」ではなく、彼らが生きる世界そのものを構築している「土台」だったのです。現地の人々と同じ地平に立つことで、私は「宗教」というカテゴリーの外に出、世界を成り立たせている基盤としての「教え」に触れることができました。その世界のすべてを理解できたとはまだ言えませんが、少なくとも「仏教」という言葉に対する私の認識の在り方は、決定的に変化したと感じています。

■「経営」という視点から見た仏教

—— 寺院や宗教組織を「経営する」という視点から研究を進めるなかで、仏教に対する先生の理解はどのように変わりましたか。

「仏教」という言葉の捉え方が変わったのと同様に、「経営」という概念に対する私の理解も大きく変容しました。かつて私は、寺院の経営を一般的な企業経営と同様に、「活動資金をいかに獲得し、管理し、配分するか」という資源管理（リソース・マネジメント）の意思決定プロセスとして捉えていました。しかし、研究を進める中で、より本質的なのは「何のためにそれを行うのか」という目的の次元にあると気づきました。寺院における目的とは、すなわち仏教の布教です。しかし、そこで「何を布教するのか」を突き詰めると、固定的な正解は存在しません。現場の実践者たちが、目の前の現実と向き合いながら、仏陀の教えをその都度「再解釈」し続ける営みそのものが問われることとなります。現実と教えの乖離（ギャップ）を埋めるために新たな解釈が生まれ、その解釈が再び人々の生活を形作っていく。この、教義と現実が相互に作用し合う動的な循環プロセス全体を、私は「仏教経営」と定義しています。

■ ミャンマー寺院と日本寺院の運営の違い

—— ミャンマー寺院と日本の寺院に関わる中で、それぞれの運営の特徴や大切にしている点について、どう感じておられますか。



寶幢寺僧院長の龍源師と共に
(写真提供：藏本龍介)

私はミャンマー仏教を研究すると同時に、日本で実際に寺院を運営しています。京都で密教僧の松波龍源師と共に寶幢寺（ほうどうじ）というお寺を立ち上げ、「ミャンマー仏教的な寺院運営を日本に導入できるか」という実験的な試みを約10年にわたり続けてきました。その実践の中で痛感したのは、両国の仏教

を取り巻く「前提条件」が決定的に異なるという事実です。ミャンマー仏教は、出家者の規律である「律（ヴィナヤ）」が絶対的な基盤であり、仏法が僧侶のみならず国家や社会の在り方にも強く影響を与えています。一方、日本では歴史的に「律」の優先度が低く、お寺の在り方は「仏法」「国家法」「社会的慣習」という3つの要素のバランスの中で形成されてきました。その象徴が「葬式仏教」です。輪廻転生を前提とし墓や葬式を重視しないミャンマーとは異なり、日本では

祖先崇拜という「慣習」や、檀家制度という「国家行政」由来のシステムが深く根付いています。このような歴史的・構造的な背景があるため、日本のお寺を単に「仏法（律）」に基づいて改革することは困難です。しかし、現状維持でよいわけではありません。制度を変えることは難しくとも、仏教が持つ本来の面白さや可能性を社会へ提示することは可能です。京都での実験を通じて、私はその「可能性の伝え方」を模索し続けています。

■ 「救う／救われる」を超える実践としての寺院

—— 「救う／救われる」という考え方を超えて生き方や社会を考えるうえで、寶幢寺での実践からどんな気づきがありましたか。

私は「人を救う」という言葉があまり好きではありません。なぜなら、「救う／救われる」という関係は、どうしても「強い人／弱い人」という壁を作ってしまうからです。誰だって、自分を「助けが必要な弱い存在」だとは思いたくありません。みんながもっと元気に、幸せに生きる方法はないだろうか。そのヒントを、私はミャンマーの「お布施」の光景にを見つけました。日本では「寄付」というと少し身構えてしまいましたが、ミャンマーの人たちは違います。彼らは実におおらかに、楽しそうにお金や物を捧げ、それによって社会が回っています。そこで私が発見したのは、彼らが義務感ではなく、「与えること自体を楽しんでいる」という事実でした。誰かのために何かをすることで、自分自身も嬉しくなる。試して、楽しんで、気づけば自分の世界が広がっている。「与える」とは、自分と世界を新しく作っていくような、ワクワクする営みだったのです。この感覚を、日本でも味わえる場所にしたい。そんな思いで寶幢寺を運営しています。ここに来て、人と出会い、「与える喜び」を体験し、その温かい気持ちを家に持ち帰ってもらう。そうやって、小さな喜びが波紋のように社会へ広がっていくことを願っています。

■ 今後の研究・実践の方向

—— 最後に、今後の研究や実践について、これから特に深めていきたいテーマや方向性があれば教えてください。

ミャンマーの政情不安により、現地渡航が困難な状況が続いていますが、これは私の研究にとって終わりではなく、新たな展開の始まりでした。現在は、自ら運営する日本のお寺そのものを一つの「実践的な調査フィールド」と位置づけ、研究を継続しています。さらに、このフィールドはお寺という枠を超え、企業へと拡張しています。具体的には、「コミュニティナース（CNC）」のような、志を同じくする団体との共同研究です。彼らの活動の言語化や書籍の執筆、さらには経営判断のプロセスにも参画し、「与える喜び」や「自己創造の喜び」といった仏教的価値観を、いかに現代社会に実装するかを共に探究しています。現代の日本社会では、多くの人が競争や獲得を強いる資本主義のシステムの中で、「なぜこれほど動かねばならないのか」という疲弊と孤独を感じています。私の研究は、こうした問い

に対し、仏教やお寺の知見を用いて「ポスト資本主義」の豊かさを提示することにあります。一見、伝統的な仏教研究からは離れているように見えるかもしれませんが、しかし、ミャンマーで私を支えてくれた人々が託してくれたのは、「日本に仏教を伝えてほしい」という願いでした。論文を書くだけでなく、その

学びを社会のシステムや「働き方」の中に還元していくこと。それこそが、彼らの思いに応える道であると信じ、今後も実践者たちと共に考え、歩み続けていきます。

聞き手：レベデフ・ヴァシリ

写真撮影：野久保雅剛

News

東文研では、5つの部門（汎アジア、東アジア、南アジア、西アジア、新世代アジア）がそれぞれ研究を進めるとともに、所内外で連携したさまざまなプロジェクト（GAS、EAA など）が動いています。最近の出来事をいくつかピックアップして紹介します。

受賞

加納啓良名誉教授

第40回大同生命地域研究賞を受賞

加納啓良名誉教授が、「インドネシアならびに東南アジアに関する社会経済史研究」により公益財団法人大同生命国際文化基金大同生命地域研究賞を受賞しました。



藏本龍介教授

2025年度第15回地域研究 コンソーシアム賞研究作品賞を受賞

藏本龍介教授の著作 *Living with the Vinaya: An Ethnography of Monasticism in Myanmar* (University of Hawai'i Press, 2024年) が、地域研究コンソーシアム賞研究作品賞を受賞しました。



上田遥助教 (2025年3月離任)

2025年度日本農業経済学会 学術賞を受賞

上田遥助教の著作『食の豊かさ 食の貧困』(名古屋大学出版会, 2024年) が、日本農業経済学会学術賞を受賞しました。



森本一夫教授

Middle East Medievalists の 名誉会員に選出

森本一夫教授が Middle East Medievalists (中東中世研究者協会・MEM) の名誉会員に選出されました。預言者一族に関する卓越した研究、国際学界での積極的なリーダーシップ、後進に対する指導実績が高く評価されました。



キム・ジュン助教

2025年度第15回韓国女性コミュニケーション学会 学術賞を受賞

キム・ジュン助教の論文「텔레비전 역사드라마의 이양인 (異様人) 재현과 이질적 타자성의 서사 (テレビ歴史ドラマにおける『異様人』の再現と異質的他者性の物語)」(『미디어, 젠더 & 문화 (メディア、ジェンダー & 文化)』40巻1号, 2025年) が、韓国女性コミュニケーション学会学術賞優秀論文賞を受賞しました。



受賞式 (右: キム助教)

【4 研究所合同シンポジウム】

アジアの社会と動物—— 利用・共存・表象

成均館大学東アジア学術院と東洋文化研究所の研究者間の知的・人的交流を育んできた共催シンポジウムに、2011年度より京都大学人文科学研究所が、2020年度より延世大学校国学研究院が加わり、4研究所の合同シンポジウムを定期的に開催しています。2025年度は、「アジアの社会と動物—— 利用・共存・表象」をテーマとして6月27日に京都大学人文科学研究所において開催されました。

東文研からは、辻大和准教授が「朝鮮時代におけるシカ類の利活用について」、菅豊教授が「動物をめぐる伝統と現在— 普遍的価値と文化多様性の相克」と題して報告を行いました。シンポジウムでは扱われる時代も研究領域も幅広く、またそこに現れる動物表象も、物語のキャラクター、供儀、生薬資源、家畜、文化財と多様であり、全体討論では刺激的な議論が交わされました。



講演する菅豊教授

【公開講座】 アジアの境

本学のホームカミングデーにあわせて「アジアを知れば世界が見える」をコンセプトに公開講座を開催しています。2025年は、10月18日(土)に「アジアの境」をテーマに渡邊祥子准教授が「植民地アルジェリアのナショナリズム運動と女性たち」、柳幹康准教授が「境界を越える仏教」と題して講演を行いました。当日は、会場とオンラインで100名近い参加がありました。2026年度の開催は決まり次第、東文研ホームページからお知らせします。



【International Journal of Asian Studies-IJAS】

アジアに関する、主に人文・社会科学の学術論文を掲載する英文の査読誌です。東文研が編集し、ケンブリッジ大学出版局からオープンアクセスで発行しています。2025年7月に Vol. 22, No. 2 を発行しました。



Journal Citation Indicator (JCI)
Asian Studies: Q1 (12/104)



[EAA-UIA] UIA THE LECTURE

2025年10月6日、中島隆博教授の司会のもとボン大学生命倫理研究センターのクリスティアーネ・ウーベン氏とビョルン・シュミッツ＝ルン氏が、地球規模での「共生」のための生命倫理について講演を行いました。この講演会は、三菱財団人文科学研究助成・社会的課題解決のための大型連携研究助成（代表：中島隆博）との共催で実施されました。



講演するウーベン教授
(写真：伊野恭子)

[GAS Initiative]

Sumitomo Conference 2025 アジアの日本研究

2025年9月28日と10月4日の2日間、「アジアの中の日本・再訪」をテーマに、園田茂人教授の司会のもとマレーシア、ベトナム、フィリピン、台湾、日本から5名の研究者が報告を行いました。当日の報告・コメントを収録したブックレットはGASのWeb Siteで公開しています。



[学術協定] ナポリ東洋大学

2025年3月20～25日、菊池百里子助教による6回の連続セミナー「A History of Exchange in Maritime Asia:Focusing on Vietnam and Japan」がナポリ東洋大学で開催されました。ナポリ東洋大学はヨーロッパにおけるアジア研究の拠点であり、東文研は今後も継続的な研究交流を推進していきます。



写真提供：
ナポリ
東洋大学

Publication

東文研の教員による最新著作を紹介します。詳しくは東文研ホームページまで。



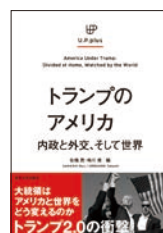
上田 暲 著
『日本栄養思想史
— 佐伯矩の生涯
と近代栄養学』
(昭和堂、2025)



松田康博 著
『中国と台湾
— 危機と均衡の
政治学』
(慶應義塾大学
出版会、2025)



中島隆博 編
『比較思想と
世界哲学』
(東京大学
出版会、2025)



佐橋亮・梅川健 編
『トランプの
アメリカ 内政と
外交、そして世界』
(東京大学
出版会、2025)



藏本龍介 著
『仏教を「経営」する：
実験寺院の
フィールドワーク』
NHK ブックス 1293
(NHK 出版、2025)



パッタジット・
タンシンマンコン 著
『タイ外交史を読み直す
— 「竹の外交論」
からの脱却』
(東京大学出版会、2025)



ボルジギン・ブレンサイン・
広川佐保・辻大和 編著
『東アジアにおける
移動と交錯—内モンゴル、
中国東北、朝鮮をつなぐ
近現代地域史』
(明石書店、2025)

People

プアントン・パワカバン教授が「新世代アジア研究部門」の客員教授として着任しました。



(写真：野久保雅嗣)

[着任研究会] Modern Uniform, Medieval Mindset: Feudal Culture and the Thai Military's Business Empire

2025年11月22日、プアントン・パワカバン客員教授による着任研究会が開催されました(司会：佐藤仁教授)。本発表では、タイ軍のビジネス運営の詳細な分析が提示されました。そして、前近代的なエトスは、職業的軍隊への改革と、実質的な国家安全保障および国民的統合の実現にとって重大な障害となっていると結論づけました。

PAWAKAPAN Puangthong (プアントン・パワカバン) 教授

1996年、オーストラリアのウーロンゴン大学にて博士号(歴史学)を取得。2005年よりチュラーロンコン大学政治学部において教育・研究に従事し、2021年に教授に就任。著書に *Infiltrating Society: The Thai Military's Internal Security Affairs* (ISEAS Yusof Ishak, 2021)、*State and Uncivil Society in Thailand at the Preah Vihear Temple* (ISEAS Yusof Ishak, 2013) など。2025年10月から12月まで、東洋文化研究所客員教授として着任。

東洋文化研究所基金 ご支援のお願い

東洋文化研究所の活動を支えるため、ご支援をお願いします。

* 本基金へのご寄付には、本基金と東京大学基金の両方の特典が適用されます。

詳しくはホームページをご覧ください。

* 寄付特典の発送は日本国内に限らせていただきます。



tokyo.ac.jp/project/pjt180

東洋文化研究所 Newsletter No.4

2025 年秋季号

編集担当：レベデフ、菊池

写真：野久保雅嗣

東京大学東洋文化研究所

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

✉ webadmin@ioc.u-tokyo.ac.jp